

# 房総の 文化財

VOL.8

ISSN 0910-0848  
Bōsō no bunkazai

平成7年11月30日

財団法人 千葉県文化財センター

千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811(代)

FAX 043-422-8850



# 発掘調査速報

## わが国最古の貨幣「和同開珎」が出土 千葉市観音塚遺跡

千葉市中央区千葉寺町にある観音塚遺跡で、奈良時代の住居跡から、わが国最古の貨幣「和同開珎」(銅銭)が出土しました。錆びて「開」と「珎」の文字が読みにくく、全体がわずかに曲がっていますが、完全な形をとどめています。

和同開珎は、唐の開元通宝という貨幣にならって、和銅元年(708年)に発行されました。はじめは銀銭がつくられましたが、銀銭は翌年廃止されました。一方銅銭は、その後50年ほど使われた奈良時代を代表する貨幣といえます。



比べてみると 25.0mm 直径 23.5mm  
1.48mm 厚さ 1.55mm  
2.3g 重さ 4.5g

当初、和同開珎(銅銭)1枚は、穀6升(現在のお米にすると約1.8kg)と換



X線写真を拡大して着色したもの

和同開珎の出土した住居跡



和同開珎の出土状況



えられるという命令が出されていました。しかし、それが通用したのは都とその周辺に限られ、地方では、依然としてお米や布などが貨幣の役割を果たしていました。

奈良の都・平城京から遠く離れた千葉県内では、今回の観音塚遺跡のものを含めても、これまでに7遺跡から8枚(銀銭1枚、銅銭7枚)が見つかっているにすぎません。

当時、下総の国と呼ばれていた観音塚のムラ周辺でも、はるばる都からもたらされた和同開珎は、「咲く花のにほふがごとく」と歌われた平城京の華やかなようすや、都の文化の薫りを感じさせるものとして、人々に珍しがられていたと思われます。(山田貴久)

# 収蔵遺物コーナー

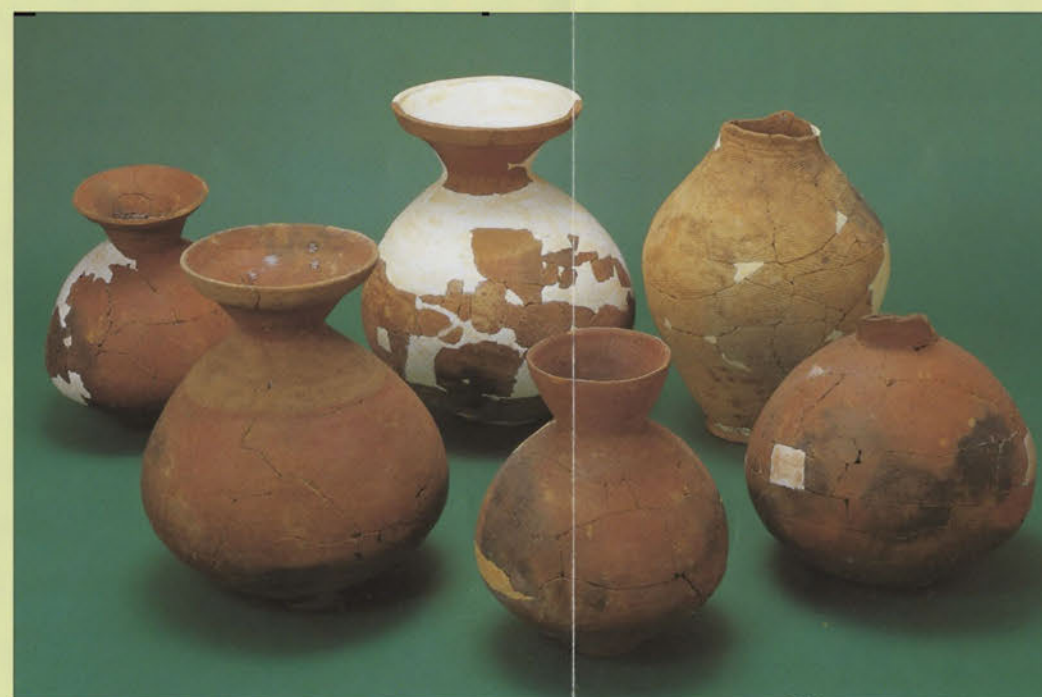
## 弥生土器の美しさ

手賀沼を北に見下ろす沼南町泉という高台に石揚遺跡があります。この地は現在では手賀の丘少年自然の家となっています。

発掘調査は平成元年から行われ、2万年以上前の石器製作跡や縄文時代前期(5,000年ほど前)の集落などたくさんの遺構を発見しました。

中でも、弥生時代の終わりごろ(1,700年前)の方形周溝墓と呼ばれる墓を5か所調査しました。これらは中央に掘りくぼめられた墓穴を溝で四角に囲んだ施設で、大きなものでは溝の外側で図ると20mを超す例もあります。畳2枚分で先祖代々の墓といった今のお墓と比べると、その大きさに驚かされますね。

右の写真は、その溝の中から見つかった壺形をした弥生土器です。博物館などでよく見かける縄文土器と比べると、非常にすっきりしたプロポーションをしています。でもよく見ると口の部分だけを分厚くし、その部分や肩には細かい縄文の文様を入れたり、全体を赤く彩色したりしており、当時の人々の美的センスをうかがい知ることができます。(谷 旬)



2号方形周溝墓の土器(撮影・堀越知道)

# 埋文アヲカルト

## 土と炎の芸術～土器の発明と縄文人の暮らし～

今から約1万年前、長い氷河期が終わると気候はだんだんと今ようになり、気温の上昇とともに陸上の氷や雪がとけて海面が上昇しました。

そして、大陸から完全に切り離された日本列島に、新しい独自の文化が生まれ育ちました。こののち弥生時代が始まるまでの約8千年間を「縄文時代」と呼びます。

### ＜土器の発明＞

石で作った道具が中心の旧石器時代から縄文時代になると、様々な材料で道具やアクセサリが作られました。中でも私たちが驚かせるのは土器の発明です。土器の発明は、人類が物の化学変化を自覚的に利用した最初の出来事として画期的です。

そして「土と炎の芸術」と呼ばれる焼き物の歴史が、土器の発明とともに始まったのです。(粘土を焼いたものには、土器のほかに土偶などの土製品もあります。)

土器の発明は人々の食生活に大きな変化をもたらしました。煮炊きができるようになり、これまで食べられなかったものが食べられるようになったり、これまで以上においしく食べられるようになったのです。

粘土をこね、焼いて作られた土器の一つ一つには個性的な形や文様が見られます。(何ととっても一つ一つが手作りなのです。)

### ＜縄文土器＞

縄文土器は縄の文様が特徴的だったために名前がつけました。でも、縄文土器と一口に言っても、時期や地域によって形や文様の付け方に変化があります。その特徴から、古い方から草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6つに区分けされ、遺跡の時代を知る

ための尺度として利用されています。

各時期にそれぞれすばらしいものがありますが、その中からここでは後期の土器と土偶を紹介しましょう。

### 曾谷式土器



千葉市六通貝塚

バランスの取れた壺型の器形と手書きの文様がとても美しく、今見ても、とても洗練されています。

### 山形土偶



千葉市六通貝塚

頭部が山形に盛り上がっており、「山形土偶」と呼ばれます。

腹部の突き出た姿は妊婦を表し、女性が無事に出産し、子供もすこやかに育つようにとの祈りをこめて作られたものと考えられます。

わずか8cm余りの大きさにすぎませんが、土偶は縄文人の様々なおもいを私たちに伝えてくれているようです。(山田孝雄)

今回は、去る8月19日から25日に市原市五井会館で行われた「<sup>たけし</sup>武士遺跡展」で寄せられた質問の中から一つ選んで紹介しようと思います。

Q 武士遺跡展では原寸大の<sup>たてあな</sup>竪穴住居の<sup>ふくげん</sup>復元模型が展示されていましたが、<sup>もけい</sup>竪穴住居の<sup>たみ</sup>広さは<sup>じょう</sup>畳で何<sup>たみ</sup>畳分ぐらいになるのでしょうか？

A 一口に竪穴住居といっても、時代や地域によって大きさや形は様々です。

竪穴住居が日本に現れるのは、旧石器時代までさかのぼると言われています。

この時期の住居は円形の皿状のくぼみで、面積は約12.5㎡～19.5㎡（約8畳～12畳）ほどです。

<sup>じょうもん</sup>縄文時代になると竪穴住居が本格的に営まれるようになります。

縄文早期～前期のものは四角形のものが多く、ほかに円形・<sup>だま</sup>橢円形のものが見られます。大きさは10㎡未満～40㎡（約6畳～25畳）と様々です。中期から後期にかけては、<sup>ほりこ</sup>掘込みの深い円形のものが多くなり、晩期には再び四角形のものが増えます。大きさは約15～30㎡（約10畳～20畳）ぐらいが普通です。

武士遺跡の例は中期のもので、約25㎡（約15畳）ほどの<sup>きぼ</sup>規模になります。

弥生時代では、円形のものも作られますが四角形が中心です。普通大きさは約30～40㎡（約20畳

～25畳）ほどですが、大型のものもあります。200㎡（約124畳）にも達する例も知られています。

<sup>こふん</sup>古墳時代になるとそれまで地域などにより変化のあった形が、四角形にまとまってきます。10～30㎡（約10～20畳）ほどのものが多く作られますが、時には、約90～100㎡（約55～62畳）ほどの大型の住居も作られました。

奈良時代から平安時代の竪穴住居は4㎡～10㎡（約2～6畳）の小型のものが多くなります。

これまで竪穴住居の面積について見てきましたが、実際には中に<sup>かまど</sup>炉（いろり）や竈が設けられていたり、柱が立っていたことを考えると、現在私達が住んでいる部屋と単純には比べられないかもしれません。

大小さまざまな竪穴住居から成り立っている古代の集落ですが、そこから当時の家族構成や「むら」の実態を復元することが、考古学の重要なテーマのひとつとなっています。（吉野健一）

武士遺跡展の竪穴住居模型



## 表紙の説明

<sup>ほにわ</sup>古墳時代の人物埴輪（女性）  
印旛郡印旛村 瀬戸大木台2号墳出土

埴輪は、古墳の墳丘のまわりに配列されたもので、大きく分けて円筒埴輪と<sup>けいしきよう</sup>形象埴輪があります。

表紙の埴輪は、形象埴輪と呼ばれるものです。形象埴輪は、人物のほかにかたち・動物（馬、猪、鶏、水鳥など）・器財（盾、大刀、兜、椅子など）などさまざまな形のものがあり、当時の社会・風俗を知ることができます。撮影：堀越知道

## 編集後記

新しくA4判になった「房総の文化財」第7号は、いかがだったでしょうか。

発行後の<sup>はんきよう</sup>反響は、イメージの刷新という点では好評だったと思います。その中で「表紙からみて見開き4ページは少ない」「保存するのに穴を開けたいが、文字や写真にかかってしまう」「文章をやさしく、写真や絵をもっと多く」などの御意見もいただきましたので参考にしたいと思います。（S.S）